

韓国薬学研修報告

田川佳於里
國府方梨菜
林 明日香

《概要》

2019年8月7日～8月10日の4日間、韓国の漢陽大学にて韓国研修が行われた。本学から4年生4名、3年生5名が参加した。研修では、漢陽大学薬学部のキャンパス訪問や漢陽大学付属病院の薬剤部・地域薬局（門前薬局）・韓方市場・韓方博物館・ソウル大医学博物館を見学した。また、漢陽大学薬学部の学生との交流や韓国での文化体験も行った。私たちのグループは、漢陽大学薬学部と漢陽大学病院の薬剤部についてまとめた。

《漢陽大学薬学部》

漢陽大学薬学部は、製薬・バイオ関連の企業などが所在し、学・研・産融合クラスターとして機能している ERICA キャンパスに所在している。薬学部の建物には、講義室・実習室・研究室・模擬薬局があり、薬剤師になるために日々、勉学に励んでいる。



漢陽大学薬学部には在籍する学生は、1学年30名と本学薬学部の1学年の学生数（145名）と比べて少ないが、漢陽大学薬学部には在籍している大学院生は、本学の大学院生より多い。

韓国の薬学部は、6年制（2+4 system）である。2+4 system とは、2年間、薬学部以外の学部の大学で基礎科目（物理・化学・生物・数学など）を学び、大学を卒業する。その後、倍率が高い薬学部の入学試験に合格することで、薬学部の学生として4年間、薬剤師に必要な薬学の専門的な内容を学習するのである。現在の韓国では、2+4 system にて薬学教育が行われているが、2022年からは、1年生から薬学部に入學し、薬学の専門的な内容を学ぶ日本のような薬学教育に移行するのである。

韓国の薬学教育と日本の薬学教育の相違点を以下の表1に示す。

表 1 日本の薬学教育と韓国の薬学教育の違い

	日本	韓国
薬学部への入学要件	高校を卒業すること	高校卒業後、2年間他大学にて基礎科目を学び、大学を卒業すること
CBT・OSCEの有無	4年次に行われる	ない
実務実習の時期	5年生	6年生
実務実習の期間	11週×2 (薬局・病院)	1年間 (基礎実習+アドバンスト)

※ CBT…Computer-Based Testing

OSCE…Objective Structured Clinical Examination

アドバンストとは、薬局・病院・製薬会社・研究の4つの施設から1つを選び、15週間かけて薬剤師の仕事などの内容を深めていくのである。病院でのアドバンストは、6分野（TDM・副作用、DI、臨床試験、抗がん剤、服薬指導、人工栄養補給）から3分野を専攻し、自分自身が興味を持った分野の内容について15週間かけて学び、内容を深めていく。



《漢陽大学病院の薬剤部》

ソウル市内にある漢陽大学病院は、病床数が855床、34名の薬剤師が勤務している。漢陽大学病院にて診察を受けた患者には、院外処方箋が渡され、門前薬局などの薬局から薬をもらうことになっている。しかし、重症の患者は、院内処方箋によって、病院内の薬局から薬が渡さ

れるのである。このような医薬分業の仕方は、韓国も日本と同じように行われていることが分かった。医薬分業により、薬剤師は、患者に対しての服薬指導に時間をかけて専門的な知識を分かりやすい内容で患者に提供することによって、患者が適切に薬を使用するように努力していると感じた。

韓国の医療システムと日本の医療システムにおける相違点があった。その相違点とは、医療機関にて DUR (Drug Utilization Review : 医薬品の適正使用情報) が利用されている点である。DUR とは、お薬手帳が普及していない韓国にて患者に処方された医薬品の情報をパソコン上で管理しているシステムのことである。DUR では、患者に新しい種類の薬が処方された時に、併用禁忌となっている場合や薬が重複している場合、投与量などに異常があれば、アラームが鳴る。このことにより、重大な医療事故を防ぎ、患者が効果的に治療を受けることができる。

漢陽大学病院の地下1階には、治験薬を保管している部屋があった。その部屋では、治験薬を保管するために、部屋の温度や治験薬ごとに

保管する棚の温度が厳密に管理されていた。治験に関する部署にて勤務している薬剤師は、1人で70件程度の治験薬に関する結果のデータを収集し、海外の臨床試験にも関わっている。漢陽大学病院は、治験を行うことができる施設として国から指定されており、治験を行うこと



ができる施設許可が日本とは異なっていた。

今回の韓国研修にて病院での薬剤師の役割や医療システム、患者の保険制度などについて理解を深めることができ、良かった。韓国研修にて学んだことを5年次の実務実習に活かせるように自分自身に何ができるのかを考えていきたい。



《漢陽大学薬学部の学生との交流》

漢陽大学病院の薬剤部などの施設見学終了後の懇親会（夕食）にて、漢陽大学薬学部の先生や学生と交流を行った。懇親会開始時は、お互いにどのような会話をすればいいのかと戸惑いと緊張により、会話をすることができなかった。



しかし、時間が経つにつれ、どのような会話をすればいいのかという戸惑いや緊張がなくなり、お互いに楽しく会話をすることができた。

漢陽大学薬学部の学生との交流は、懇親会の短い時間だけであったが、韓国研修における貴重な思い出として残っている。また、懇親会にて、漢陽大学薬学部の学生の連絡先と本学学生の連絡先を交換することができ、今後も漢陽大学薬学部の学生と交流できることをとても楽しみにしている。

《感想》

今年度、開催された韓国研修に参加させていただき、韓国の病院や薬局の施設見学や文化体験などを行ったことにより、日本と韓国での医療や文化の相違点などについて実感することができた。

今回の韓国研修にて学ぶことができた日本と韓国の医療の相違点から、薬剤師になった際の自分が患者に対して何をすることができるのかをしっかりと考え、今後の勉学や実習、5年生での実務実習に活かしていきたいと思っている。

最後に、本研修に当たって、多大なるご支援をいただいた愛知学院大学薬学会に心よりお礼を申し上げます。

ありがとうございました。